

意識と無意識の関係

個人的無意識の肯定的側面について

加 藤 實

Relationship between Conscious and Unconscious

Positive Aspects of the Personal Unconscious

Minoru Katou

The unconscious mind is the source from which the ego emerges, and with it we embark on our life in society. Once life in society has begun, whatever goes against the ego's way of living is unconsciously repressed.

The shadowy and negative existence of this repressed world creates pschical tension for the ego. S. Freud believed that the purpose of psychotherapy was to make this repressed negative unconscious (complexes)conscious, and he worked at doing so throughout his life.

On the other hand C. G. Jung insisted that a positive productive side to the unconscious (complexes) exists, and with it he constructed Jungian theory.

In this research I have put forward an analysis of the role of the unconscious. As a result I came to understand that, while the personal unconscious is a negative existence, it also plays a positive role in protecting the ego from the collective unconscious. While complexes work to threaten our ego, at the same time they also work to protect it. The destructive nature of the collective unconscious is so intense that the ego needs protection from it. Thus I came to see the efficacy of the personal unconscious in the protection of the ego. In the future I would like to deepen my research into the workings of the unconscious mind and its affects on the conscious mind.

1 はじめに

無意識¹は、ユング心理学にとって重要な概念の一つである。ユング²は、フロイト³の提唱する無意識なる考えに共鳴し研究を進めてきたが、フロイトの無意識に対する考え⁴に疑問を持ち彼独自の無意識論⁵を展開することとなる。以下ユングの無意識論を中心に無意識と意識の関係について考える。

人間が自分の存在を認識するとき自我⁶を中心に考えるのは、ごく自然なことと思われる。意識の統合体としての自我に軸足をいた存在の認識は、我々にとって抵抗なく受け入れられる。しかし、日常生活の中で神経症、ヒステリー、精神分裂病などの患者さんに会うと「どうしてこんな行動...」と考えてしまうことがある。精神医学の専門家もこの領域の説明にはいろいろ試行錯誤の研究が繰り返されたものと思うが、ここでは触れることはできない。少し身近な現象として、最近みられるのに「不登校⁷」をあげることができる。また、「いじめ⁸」、「虐待⁹」などの不適応行動もその説明は簡単ではない。

こんな背景を念頭に置くと、意識中心の考えだけでは、身近に起きている精神現象を十分説明できないことがよく分かる。ここに無意識発見の必然性が考えられる¹⁰。無意識を考えることにより、日常精神現象をよりよく説明できるのである。しかし、従来の考えは、無意識はあくまで従的なものであって、主体は意識にあった。こうした意識中心の考えに対して、ユングは、無意識をもっと肯定的に捉え、さらに、意識より無意識の方が領域的に広いものであること、に目を向けるべきであると主張した。さらに、その内容も創造的な要素を含んだ肯定的な無限の領域であると主張した。カウンセラー（相談員）として臨床に携わると、無意識を単なるネガティブとして捉えるのではなく、ポジティブなものとして捉えることの生産性はよく理解できる。かくして、心を無意識をも含めた広く深い無限の領域と考えることにより、自我に対して、自己¹¹なる概念が浮かび上がってきた。

この広大無限の領域を持つ無意識の内容も、研究が進むに従って、階層的¹²に捉えられるようになった。この心を階層的に捉える試みは、次にその階層間の関係が問題となってきた。すなわち、意識と無意識とはいかなる関係にあるか。無意識を個人的無意識と普遍的無意識に分けて考えると、意識、個人的無意識、普遍的無意識がいかなる関係を持って存在しているか。生活体としての心は、意識が中心になるが、それならば意識は無意識とどのような関係を持っているのであろうか。関係があるとすればどのような方法で関係を持っているのであろうか。さらに、その効果と意味は何か。無意識の中でのそれぞれの有り方¹³が研究の対象となった。このように現在では、無意識の構造、機能について研究が進められている。日常生活の不応現象を、無意識の存在を考慮に入れて分析することにより治療計画を立て、実施し成果をあげることができるようになった。が、不明な点も多いので、ここでは、個人的無意識に注目して分析を進めることとする。無意識内で個人的無意識はどんな状態にあり、どんな働きをしているか。自我との関係で分析を試みてみる。

2 問題と目的

無意識を階層的に認識した場合、個人的無意識¹⁴は、意識の世界で生きられなかった残滓をその主たる構成要素とする。一方、普遍的無意識¹⁵は、個人を越え民族を越えた人類共通の心として存在する。この二つの無意識のうち個人的無意識は、意識との間に相互関係を認めることができるが¹⁶、同様に、普遍的無意識も意識に影響を与えるものであるが、意識からの通信手段は乏しい。すなわち、通信が一方的で相互性に欠けるのである。¹⁷相互性に欠けるということは、意識の統制が及ばないということで、この点個人的無意識との間に違いが見られる。一般に、普遍的無意識は、その内容に肯定的な面と否定的な面を持つとされる。すなわち二面性である。ただしこの考えは、無意識内の存在を人の生活上から見て価値的に判断したとき生ずる結論であって、価値にとらわれずに考えたとき、その本質はどのようなものであろうか。ユングは、その本質として普遍的無意識の表現の基本形に元型¹⁸を考えた。この心の奥深い所でなにが起きているのか。どのようにしたら、心の奥深いところの活動を知ることができるのか、山中³¹⁴は「ユングはミトラ祈祷書のような宗教書や、古事記、ギリシャ神話などの神話というものは、人間の心の奥底にある真実を書いたものであると考えた。人間に意識がまだ薄明だった太古の時代に、人々の心の奥底にあった集合的なイメージが突然凝縮され、析出してきたもの、それが宗教書であり、神話である。それはちょうど、水の中に砂糖を溶かして行って、ある量を越えて飽和点に達すると、

目に見える形で析出してくるようなものである。」と普遍的無意識から表現されたものとして宗教書、神話を捉えている。このような考えは、普遍的無意識の心的内容表現を明確に規定したものとして評価することができる。もともと無意識は、意識されないものであるから、意識がなんらかの形で関与し認識した範囲で、その存在を確認できるものである。このように考えると、普遍的無意識から意識への働きかけは認められるし、同時にその働きかけを確認することもできるのである。本研究においては、意識と無意識の関係を明らかにすることであるが、とりわけ、無意識内の心的活動の相克性を分析し、同時に、個人的無意識の肯定的側面について、普遍的無意識を視野に入れながら分析することを目的とする。具体的には、無意識は二種類(個人的、普遍的)に分類できるが、この二層になった無意識がどのような相互活動をしているか。この無意識の活動を自我との関係で捉えることを試みることにする。

2 1 元型の二面性

元型にはいろいろなものが考えられる。¹⁹この元型は、意識に与える影響から考えると、ポジティブな面とネガティブな面を持つ。例えば、元型太母 (great mother) は、包含機能を中心に恐母としての死の働きと、善母としての生の働きの二面性を持つ。ユング心理学の見地から見れば、無意識は地球全体に匹敵するほどの大自然であり、一方意識は、陸地に発展した一つの都市にすぎないのである。大自然の前には、都市に栄えた文化も比較にならないほど小さなものである。自然は、人に多くの恵みを与えてくれると同時に、人の命をも奪う恐ろしさも持っている。この譬えで分かるように、人類共通に心の奥深く保持し受け継がれてきた元型は、+と-の二面性を持つ。意識の中心機能である自我は、この普遍的無意識からの心的エネルギーにより、成長発展すると同時に、自我が破壊されるかもしれない脅威に直面させられている。この脅威に対して、心は自衛策として自我防衛²⁰の機能を発展させてきた。通常、自我防衛は、耐え難い苦痛、不快、不安を意識化することによって起こる心的苦痛を、回避するために、無意識的に働く自我安定の機能であると考えられている。このように、元型には二面性が見られるが、自我にとっては元型のネガティブな力の大きさに脅威を感じざるを得ない。この脅威をどのようにして防ぐか(意識的)、また無意識内でどのように自然調整がなされているか、分析を要するところである。

2 2 日常生活の中での自我防衛

普遍的無意識の脅威から自我を防衛するために、いかなる機能が働くのであろうか。現実社会生活の中で古くから営まれてきた神事、仏事、芸術、遊び、慣習、祈り、懺悔、禅、通過儀礼、神話、芸術、などは、少なからず、普遍的無意識の活動と関係している。我々の社会生活は、自我を中心に営まれているが、意外に多く無意識の参入を許していたのである。そしてその無意識の扱いを経験上考え出して、生活の中にとけ込ませていたのである。この点深い検証が必要であるが。現代社会においては、神事、仏事、慣習、神話等古代人が営んできたこれら生活習慣を非科学的な意味のないものとして葬り去った。しかし、果たして意味のないものであるかどうか、分析を要するところである。

2 3 意識 個人的無意識 普遍的無意識の関係

人間の出生、発達を考えると、出生時は全く意識はなく無意識だけが全てである。ノイマン²¹はこの状態をウロボロス²²とよんだ。やがて無意識から意識が生まれる。意識はその中心に自我

を発達させる。自我は社会に対して開かれた存在として自己主張し、経験を通して自己拡大をはかる。この時、自我に都合の悪いものが無意識に抑圧される。これが個人的無意識である。従って個人的無意識は意識に最も近い存在と考えることができる。一方、普遍的無意識は意識を生み出した母体である。従って起源的には普遍的無意識の方が個人的無意識より古いことになる。図示すると

無意識（普遍的）	意識	無意識（個人的）
uroboros	ego	complexes

人の生活は自我を中心になされる。自我にあわないものが無意識に抑圧されることは前に記したとおりである。この日常生活上の経過をもとに考えると、意識 無意識（個人的 普遍的）と推移するようにみえるが、起源的には上記図示のとおりである。無意識内のダイナミックな変化を考えると、この無意識の発生起源は重要な手がかりとなる。

2 4 無意識の生産性

個人的無意識は、意識で生きられなかった心的経験が抑圧されて無意識にて存在する経緯は前に触れたとおりである。ここでは、この意識からの抑圧対象の個人的無意識が、自我と相容れないという意味で、否定的な存在として見られているが、他に肯定的、生産的存在としても見ることができるのではないかと、検討が必要であると感じている。歴史的には、フロイトが無意識の否定的な面を強調したのに対して、ユングは肯定的な面に着目した。それは、創造的側面を認めたことに始まる。この点、河合によると次のようである。

「意識内において対立する（あるいは矛盾する）考えや感情などがあるとき、その片方を無視したり、抑制したりせず、あくまでその対立のなかに身をおいて苦悩していると、そのうちに、心のエネルギーが無意識内へと流れはじめ、自我はいわゆる無心の状態に陥ったり、ただ無力感に襲われたりする。しかし、それにも耐えていると、心のエネルギーが意識のほうへと還流するのに無意識内の内容が乗って、自我によって把握されることになる。その内容は言語的に明確ではなく、イメージによって把握されることが多いが、それが新しい創造の根幹となるのである。」^{引用2}

このように無意識内の創造過程を細かく分析している。この河合の分析に見るように、無意識の肯定的な側面は、一致して認められているところである。無意識を起源として、このように創造的な作品が生産されることは、大変重要なことであり、これに着目したユングの功績は大きいものがあると言わなくてはならない。しかし無意識の役割は心的内容を生産することばかりだろうか。他に考えることのできるものは何か。

2 5 自我を普遍的無意識から守る役割

普遍的無意識は大いなる自然である。意識の消費する心的エネルギーの源でもある。丁度山岳地帯に降った雨が地中にしみて長い年月を経て平地に湧き出るように、普遍的無意識に蓄えられたエネルギーは進行²³し人の社会生活のエネルギー源となる。これは自然現象に例えれば、自然の肯定的な面の現れとして見るができる。同時に、自然は、大洪水をもたらし人を苦しめることもある。普遍的無意識の内包する大きな心的エネルギーが、意識を破壊するように作用する

ことも十分考えられるのである。この普遍的無意識の破壊性は無意識内で、また自我との関係で、どんな状態を示しているのであろうか。人は、この普遍的無意識のもつ破壊性をどの様に扱い、どの様に関わってきたか。この扱い方、関わり方には二つ方法が考えられる。一つは、意識と無意識の心的交流（相互作用）をはかり、それによって無意識の意識化を進めようとするもの。他の一つは、自我防衛を強めようとするもの。前者は、積極的には種々の心理療法がこれに相当するが、日常生活で慣習的に行っている神事、仏事、その他儀式類もこれに相当する。これは、心の内的現象としてみたとき、それは意識と個人的無意識の関係の中で自然に起きた交流と考えることができる。後者の自我防衛は、現実社会で生きられなかった心的内容（コンプレックス）を意識から遠ざけることによって意識を守ろうとするものである。普遍的無意識から遠ざかることによって自我を守ろうとするのは、消極的な方法と見られがちであるが、普遍的無意識の凄まじい破壊性を考えるとこの方法が現実的で、合理的であることが分かる。

普遍的無意識は、個人的無意識と違って、人類が原初の時代から受け継いできた心的内容であるから、直接自我防衛との関係を問うことはできない。自我にとっては、受け身的であり回避的で、積極的に関わることは困難とされている。しかし、普遍的無意識の持つエネルギーを自我にとって意味のあるものに変化させることは可能ではなからうか。

2 6 個人的無意識の緩衝性

意識、無意識の機能にはいろいろあることが分かったが、ここで普遍的無意識のもつ破壊性から意識を守るものとして、個人的無意識の役割を考えてみたい。個人的無意識には、種々否定的な面があることを見てきたが、同時に肯定的生産的な面も見られた。この個人的無意識の肯定的な面の一つに、普遍的無意識の破壊性から意識を守る働きを確認することができる。個人的無意識の存在そのものが意識を守る働きをしていると見ることができる。即ち、意識と普遍的無意識の間に存在して、緩衝帯としての働きをしているとみることができる。臨床例からもこのことがいえる。心理治療は無意識の意識化がその基本であるが、これを急激に進めるとかえって状態を悪化させることがある。少しずつ時間をかけて意識化するのが基本である。このことは、無意識を意識化させると、個人的無意識の層が希薄化し、普遍的無意識の圧力が直接意識に影響を与え、結果的に状態を悪化させるものと分析することができる。以下この個人的無意識の役割について考えることとする。

3 個人的無意識の役割

個人的無意識には、コンプレックスが形成され、しばしば自我を脅かすことになる。即ち、人は社会生活において自我の欲するところと現実との間に差を認め「悩み」を持つことになる。一方、普遍的無意識は強力な破壊力を持って自我を苦しめるが、同時に心的エネルギーの源としての働きもしている。

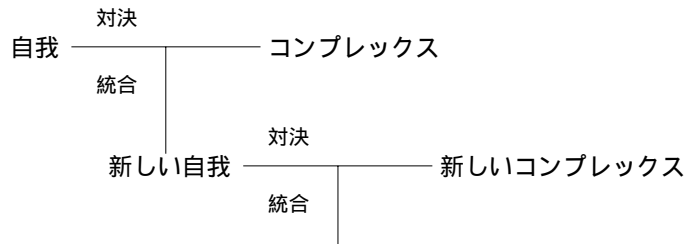
ここでは、人を育て慈しむ力と、凄まじい破壊力とを同時に持つ普遍的無意識から、自我はどのようにしてその危険を回避しているか。この場合、個人的無意識はどんな役割をしているか。検証していきたい。

3 1 自我とコンプレックス

個人的無意識にはコンプレックス²⁴や記憶（忘れられた）が存在するが、コンプレックスが主要な位置を占めているので、ここではコンプレックスを中心に分析する。コンプレックスの存在が自我のあり方に影響を与え、時には自我の存在を脅かしたりすることは前述の通りである。自我の力、自我の有り様、コンプレックスの力、コンプレックスの有り様等により、ノイローゼ²⁵、二重人格²⁶二重身²⁷、などの現象が見られ、心理治療の対象として、個人の持つコンプレックスの解消につとめることになる。しかし完全に解消することは難しい。解消とはコンプレックスがなくなることであろうか。そうではない。なくなると考えるよりは、両者の関係、すなわち自我とコンプレックスがよい関係を持つようになることと考えた方がよい。よい関係とは、両者の間に何事も起こらない関係をいうのではない。成長する自我と、力を蓄え強大になろうとするコンプレックスとの間に「対決」が生まれ、これを経て「統合」が果たされてこそ、よい関係といえるのではないか。この点を河合^{31/32}は次のように考察している。

「コンプレックスが自我に抑圧され、徐々に力をたくわえてゆく以前に、自我がコンプレックスと適切な接触を保ち、小爆発を時に伴うにしろ、その内容を自我に統合してゆく努力を続けてゆくなれば、余りにも極端な爆発を避け、安全な状態で成長が続けられると考えられる。このようなとき、自我はコンプレックスと望ましい関係にあるということが出来る。」

ここに示されているように、望ましい関係の内容は、対決と統合である。何も起こらないということではない。



ここに示したように、自我とコンプレックスとの関係は際限なく続く。しかも、この両者の関係は静的なものではなく、相互関係を繰り返す動的なもの²⁸である。フロイトは無意識の否定的側面に目を向け自説の理論化を進めたが、ユングはフロイトの理論を発展させ、コンプレックスの否定的な面も認めながら、同時に肯定的側面も強調し幅広い理論を展開した。このことは前に記したとおりであるが、ユングは更に一歩進めて、コンプレックスは心的活動にとってはなくてはならないものであると主張する²⁹。このユングの主張は何を意味しているのであろうか。どのように理解すべきであろうか。ユングは人の心的活動を自我の単一行動と見るのではなくて、コンプレックスとの力動的な関係の中にその姿を見ようとしたのではなからうか。

即ち、人の心的活動は「自我とコンプレックスの関係」の中にその姿を見ることが出来るのではなからうか。

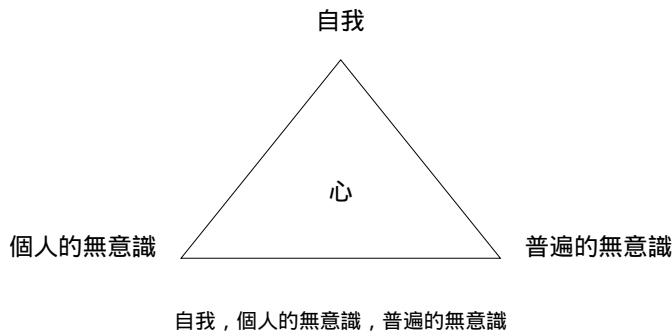
3 2 自我と元型

人は、生来的に無意識の層を持つ。これが意識化されるときは、イメージの形をとり、そのイメージをたどっていくと一つのパターンを認めることができる。これを元型と呼んでいる。この

元型と自我の間には、いかなる関係が存在するのであろうか。次のように考えることができるのではなからうか。

自我 ←→ 個人的無意識 ←→ 普遍的無意識³⁰

この図式で分かるように、普遍的無意識からのメッセージは、個人的無意識を通して自我に伝えられる。この時自我は、個人的無意識の影響を受け、変形した姿を認識することになる。個人的無意識は、個人生活を色濃く反映している心的層であるから、変形の方法も当然個人の生活を反映したものになる。しかし、臨床場面では、例えば、夢分析、芸術療法など心理療法にしばしば見られるように、普遍的無意識の元型イメージの反映かと思われる現象を確認することがある。更に神話、昔話³¹にも普遍的無意識のイメージを見ることができる。日常生活の中にも表現されている。例えば、日の出を拝むこと、大木を神格化して拝むこと、山や湖に手をあえあせ拝むこと等、そこに一種の元型的イメージを感じ取っているからではなからうか。このように考えると、自我と個人的無意識の相互関係、個人的無意識と普遍的無意識の相互関係に加えて、自我と普遍的無意識との相互関係も考えられるのではなからうか。即ち三者の関係は直線的ではなく、三角関係を試みることができるのではなからうか。



普遍的無意識の心的内容は元型的イメージとして把握することができるが、ここでは昔話の中にそれを求め自我との関わりを調べてみる。分析対象は前述の「食わず女房」³²である。(全文を資料1として示す)

昔話「食わず女房」

昔話を分析するに当たって、昔話の心理的意味について著者の立場を示しておく。昔話についてマックス・リュティは次のようにその本質について述べている。(著者の立場もこれに従う。)
 「昔話は幅ひろく多方面の学問から注目をあびている。すなはち今日では昔話は民俗学、民族学、心理学、文芸学の研究対象である。民俗学は昔話を文化史的・精神的ドキュメントとして研究し、社会におけるその役割を観察する。心理学はその物語を心的経過の表出と考え、聞き手あるいは読者への影響をたずねる。……中略……心理学研究者はその形成体が人間の心の欲求から生まれてくることに興味をもち、……」^{31)用4}

昔話をこのように、心的過程の表出と考え、それを意識が受けとめ言語化し民衆の間に受け継が

れたものと考えた。ここでは、無意識がどのようにして意識に受け止められているかを日本の昔話「食わず女房」を例により分析する。この物語を簡単に筋のみ示すと次のようになる。(筆者のまとめによる。原文は資料として巻末に記載)

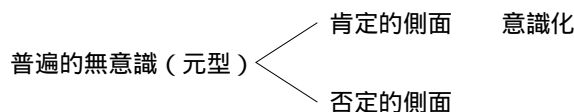
昔一人の男がいた。山仕事で生計をたてていたが、未だ独り身である。嫁をもらいたいが、何とか、飯を食わない嫁をもらいたいと考えていた。それを聞いてか、一人の美しい女が自分が嫁になると申し出てきた。きれいな着物を着て、飯を食べないよい嫁である。一緒に暮らすこととなった。ところが、この嫁は男が山へ仕事に出かけた後、五升炊きの釜に飯を炊いて、握り飯を作って、それを全部一人で食べてしまった。村の人が不思議に思って、のぞき見してみると、このことが分かった。この嫁は鬼に相違ない。と、のぞき見したことを男に告げて、分かれることを勧める。そこで五月の節供を期に嫁に里帰りを勧め、一緒に里帰りの途中、男は逃げて帰ってしまう。それに気づいた嫁の鬼は追っかけてきて、もう食われるという寸前、蓬、菖蒲の生えている所でうつぶせになった。助かったのである。鬼は怒って探しているが、蓬や菖蒲の中にはいると体が溶けてしまうので近寄れない。五月の節供に軒先に菖蒲をつるしたり、屋根に蓬を上げるのは魔物よけのためである。

この物語に示される無意識の心は、元型太母のイメージと見ることができる。母性性の否定的側面が強く示されている。即ち、はじめ飯を食わない嫁として結婚したのが、逆に五升の米を食う嫁に変身する。原文中に

「 五升炊ぎの握り飯ばみな食うがったなですと」³³

全てのものを食ってしまう、すさまじさは、太母の全てのものを包み込む心と相通ずるところがある。母性性は包含する機能を中軸とした元型の一つであるが、これが臨床面に表す姿は、育てる姿と呑みこむ姿である。この母性性の二面性から、この物語を考えると明らかに呑み込む姿、即ち死の姿を表している。母性性の否定的側面のすさまじさを表している。なぜ母性性のような美しい姿の中にこのような否定的な側面が見られるのであろうか。この現象を考えるには、無意識の補償作用³⁴に着目しなくてはならない。現実生活では母性本能に表されるごとく、人のもっとも貴い「人を育てる」行為として認識されているため、補償作用が働いたものと解釈できる。即ち、自我が余りにも一面的な姿をとると無意識は心的バランスを保つため、全体性を保持するため、補償作用が働くと考えられる。

この場合、母性性の元型が意識に作用するのは肯定的な側面(育てること)であって否定的側面(呑みこむこと)は直接的には意識されない。即ち、普遍的無意識の元型的存在の肯定的機能は現実生活で意識化されているが、否定的側面はどのような形で意識化されるのであろうか。



この否定的側面は次のように考えることができるのではなからうか。

原文中に男が鬼におわれて食われそうになったとき

「そごさ入ると、蓬と菖蒲じゃからだ溶けるというし」

男が蓬と菖蒲の草むらに逃げこんだので、鬼は近寄れずに悔しがる。無意識の否定的側面の解決法として蓬、菖蒲の魔物除けに頼って救われる。現実生活の中では、神様に対する祭りや、神事にその姿を見ることができ。鬼祓い、厄祓いなどである。普遍的無意識の否定的側面の持つ強大な破壊力は、自我により制御できるものではない。そこで神の力により祓うことが慣例となってきた。即ち、積極的に戦うのではなく、対象の大きな力を認め、その大きな力に従って解決しようとするのである。

日本の昔話のなかで「食わず女房」の類話152例³⁵を調べるとほとんどが蓬や菖蒲の草むらに逃げ込んで助かる話である。

152例の内訳は

蓬、菖蒲、竹、譲り葉、ナスの木などの草むらに逃げこむ	85例
クモになった嫁を殺す	27例
ただ逃げる	27例
嫁を追いだす、離婚する	6例
男が反省する	3例
その他	4例

この類話が示すとおり、普遍的無意識の否定的内容が自我によってどのように扱われるか。それはほとんどが逃げるということである。戦って解決しようとするのは、少ない(152例中27例)。これは、蓬や菖蒲が鬼を祓う力を持っていることを示す。蓬、菖蒲は自然の植物である。この植物に魔除けの力を認めることは、見方を変えれば、自然の力を認めていることになる。即ち、普遍的無意識の凄まじい破壊性に対処するには、自然の力に任せるということである。この点、河合³¹⁾³⁴⁾は「否定的な太母のコンステレーション³⁶が生じたとき、われわれはじたばたしてその犠牲になるよりはじっと待っていた方がよいときがある。「とき」がくると太母が自己消滅してゆくからである。」と人知(科学の知)による解決ではなく、自然知(臨床の知³⁷)による解決の大切さを暗に示している。

このことは、実際臨床の場でよく遭遇するところである。

3 3 普遍的無意識(否定的側面)の意識化の過程

普遍的無意識の否定的側面が昔話(太母)に現れていることをみてきた。ここでは思春期を迎えた子供が持つ母親に対するイメージに現れる太母の姿を検証する。

思春期を迎えた子どもは、身体の急激な変化と、第二性徴が現れ、大人への準備ができる時期を迎える。同時に、精神的には自立の意欲が強く、親離れが始まる。ここで子どもたちは、自分の親から離れるに先立って、自分の親をうとましく、いやらしい存在として忌み嫌うようになる。悪口を言い、自分の親はどうしようもない、無理解者で耐えられない存在であると、親の否定的側面を並べ立てる。本当かと思って親に会うと、物静かな教養のある立派な親である場合が

多い。このような事例は、臨床に携わるものならよく経験することである。この現象の意味するところは何か、それは普遍的無意識の否定的側面のイメージが母親に投影され、それを本当の母親としてみたことによる。子どもは、実在の親を見ているのではなく、親に投影された自分の姿を見ているのである。

河合は、この間の事情をわかりやすくまとめている。

「子どもが大人になろうとするとき、したがって、今まで自分を守り育ててくれていた両親の否定的な面が急に増えてくる。しかも、それは映画のクローズ・アップのように拡大されてくるのである。それよりもむしろ、子どもは現実の親の姿を見ているのではなく、自分の心の中の親のイメージを見ているといった方がいいであろう。」^{51)用5}

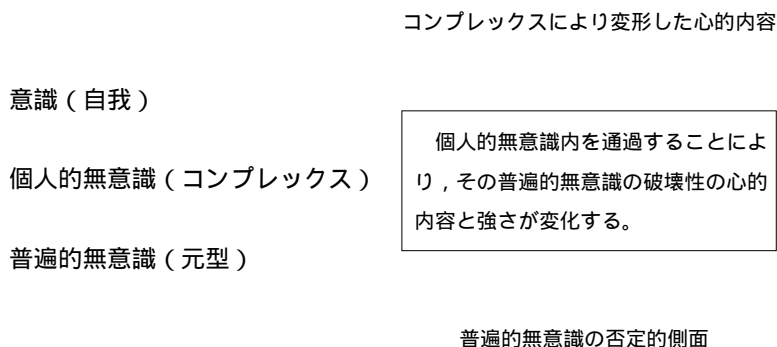
即ち、母親の否定的な面が拡大されて増えてくるのである。

普遍的無意識 否定的側面 コンプレックス
現実世界に投影 意識（自我）

現実の社会生活、家庭生活の中で母子関係が経験され、母親に対するコンプレックスが形成される。普段は感情的な対立が見られなかったのが、思春期になって急に母親に対する過激な否定的な感情を持つようになる。このコンプレックスのエネルギーはいったい何処から来たのであろうか。現実の母親が急に変われことは考えられないので、子どもの内的生活の変化に注目せざるを得ない。即ち、コンプレックスの活動である。普遍的無意識のエネルギーはコンプレックスに影響を与え、意識化される、と見ることができるのではなからうか。即ち、コンプレックスは、意識の影³⁸⁾の部分³⁹⁾が抑圧されてできた心的かたまりであるが、その役割は、普遍的無意識と自我の中間点にあって、普遍的無意識の否定的側面である破壊性を、自我に直接及ぼさないように、緩衝地帯としての役割を果たしていると見ることができるのではない。

この緩衝地帯としての個人的無意識の役割は、多分に構造的なものと見ることができる。即ち、人の心は、意識を含めてスペクトルを形成している、と見ることができる。そこでこの意識、個人的無意識、普遍的無意識の間で何が起きているのか。

3 4 普遍的無意識のイメージ通過点としての個人的無意識（コンプレックス） 自我，コンプレックス，元型の関係を図示すると次のようになる。



普遍的無意識の否定的側面のすさまじさは、昔話の逃竄譚³⁹に多く収録されている。この凄まじい破壊性は、個人的無意識内において、コンプレックスと同一化され変容されて、自我と対決することとなる。このように考えると、個人的無意識（コンプレックス）は自我にとっては、普遍的無意識の破壊性からその存在を防衛する役割を果たしていると見ることができる。

先に挙げた、思春期を迎えた子どもの、母親に対する否定的な感情体験は、日常生活の中で、母親に対して形成されたコンプレックスが原因であるが、同時に、普遍的無意識の太母元型も原因と考えられている。太母の影響を強く受け、母親に対する否定的感情が個人的無意識内で醸成されてきたのである。それは、現実には母親が、子どもが言うような無理解な人でないことを、治療者は確認できるからである。

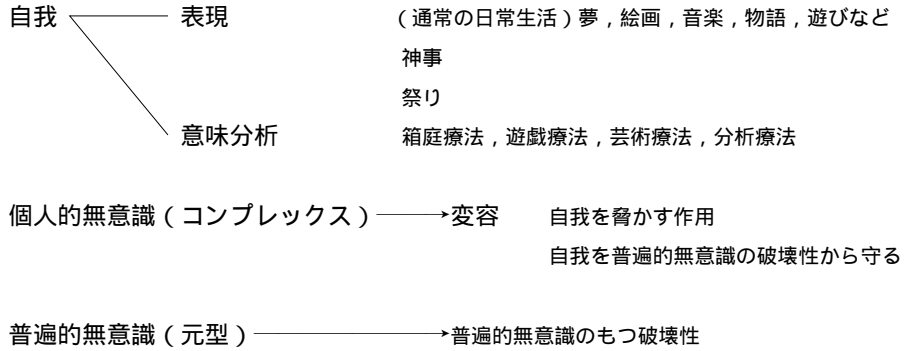
個人的無意識（コンプレックス）は、現実生活の中で経験する感情を軸に肥大する。一方、普遍的無意識の元型的イメージもコンプレックスに影響を与え、いよいよ強大なものへと成長する。この場合、両者が互いに影響し合って新しい心的内容を形成することは想像できるが、その姿はいかなるものであるか。単に力が増すというような単純な変化ではないのではないか。

3 5 コンプレックスの変容

個人的無意識内に出現するコンプレックスは、心理療法場面において自我との交流をもつことができる。即ち、自我の影響を受け変容する。通常、日常生活場面においては、自我からコンプレックスへの働きかけはない。このため、自我がコンプレックスによって脅かされることになる。自我とコンプレックスとの相互作用が常に行われていれば、全体として安定した状態を保持できる。意識的な相互作用は、認められないが、表現は確認できる。例えば、夢、絵画、音楽、物語、遊びなどである。表現されたものがいかなる意味を持つか、これを調べるのが分析であるが、その意味分析がなくても、単なる表現であっても、コンプレックスの変容は期待できる。夢を見ること、絵を描くこと、音楽に親しむこと、物語を創ること、遊ぶこと、など日常行うことによりコンプレックスは変わってくる。

自我→コンプレックス←普遍的無意識（元型）

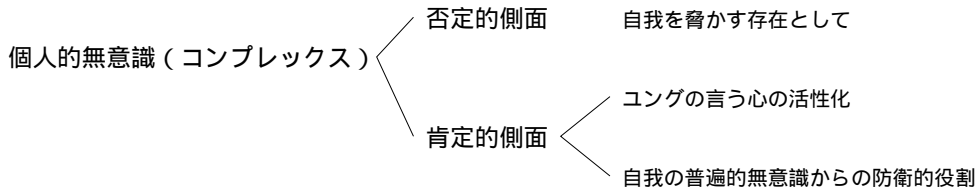
このように見てくると、普遍的無意識の破壊性は、普遍的無意識と個人的無意識が相交わることにより変化することになる。即ち、自我は普遍的無意識のイメージに間接的にはあるが、影響を与えることになる。自我を脅かすものとしてコンプレックスを考えてきたが、自我を守る働きもあると見ていいのではなからうか。心理治療は、無意識内のコンプレックスを意識化し、意識の統制下に置くことにより、安定したバランスのとれた精神状態を創り出すことである。治療中コンプレックスの意識化が順調に進み、問題行動が一時消失し、これで治療の終結かと思われたとき、逆転し元の状態に戻ってしまうことが臨床場面ではよく見られる。これは、コンプレックスの分析を急ぎすぎたため、コンプレックスの力が急に弱まり、相対的に普遍的無意識の破壊性が強まり、問題を大きくしたと考えることはできないであろうか。即ち、個人的無意識（コンプレックス）は普遍的無意識（元型）の破壊性から自我を守る防波堤の役割を持っていると見てよいのではなからうか。ここに、個人的無意識（コンプレックス）の両面性を認めることができる。



無意識内の関係と変容

3 6 コンプレックスの両面性

普遍的無意識の破壊性の凄まじさは、前出の昔話に示されているとおりである。自我は、直接影響を受ければ、逃げるより方法の無いほど存在を脅かされる。しかし、この普遍的無意識は、個人的無意識に影響を与え、それによって間接的に自我と交渉を持つことができるのである。この場合、個人的無意識は、普遍的無意識の破壊性を吸収し、自我にとって厳しい存在として作用することになる。この考えが従来からの見方であるが、⁴⁰ユングは無意識の肯定的な面をも認め、コンプレックスの働きを広く、緩やかに解釈した。即ち、このコンプレックスの肯定的側面に着目したことである。そしてこの肯定的側面については、次のように考えることもできるのではなからうか。即ち、一つはユングの言う⁴¹心の活性化であり、他の一つは、普遍的無意識の破壊性から自我を守る緩衝帯としての働きである。



このように、個人的無意識の肯定的側面にも複数の機能を見いだすことができた。

4 普遍的無意識の役割

「集合的無意識⁴¹とは「こころ」全体の中で、個人的体験に由来するのではなく、したがって個人的に獲得されたものではないという否定法によって、個人的無意識から区別されうる部分のことである。……中略……集合的無意識の内容は一度も意識されたことがなく、それゆえ決して個人的に獲得されたものではなく、もっぱら遺伝によって存在している。……中略……集合的無意識は本質的に元型によって構成されている。」^{引6}

普遍的無意識は、個人の経験によって獲得されたものではなく、遺伝⁴²によるものとユングは

考えている。この普遍的無意識の構成要素である元型は、前述(2-1)のとおり肯定的側面と否定的側面を持つ。自我にとってこの両側面の活動性はコンプレックスに影響を与え、間接的に自我と結ばれる。(3 個人的無意識の役割)このことを前述のとおり考察してきた。ここでは、前述(2-3, 2-4, 2-5)の自我、個人的無意識、普遍的無意識の関係を総合的に考察する。

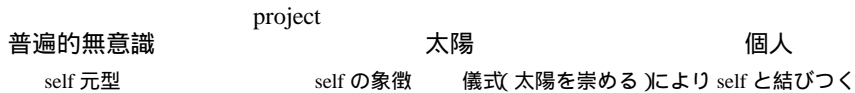
4-1 儀式的関わり

普遍的無意識の心的活動を、自我が把握するとき、即ち、意識されるとき、それはイメージの形をとる。そして、そのイメージが外界の対象に投影されて象徴となる。

ここに一つの例を示す。ユングがアメリカに旅をし、タウス・ブエブロスのインディアンの村長⁴³と対話したとき、彼等インディアンが太陽を崇めている様子が話されている。

『オチウエイ・ピアノと屋根に腰掛けていると、太陽は高く高く昇り、まぶしいほどに輝いた。そのとき、彼は太陽を指していった。「そこに行く太陽が我々の父ではないだろうか。そうでないといえよう。他に神が存在するなど。太陽がなくて、なにが存在できるだろうか。」すでに彼には興奮の色が現れていたのだが、ますます亢ぶってゆくようだった。』^{引7}

この場合、彼にとっては、太陽は自己(元型)の象徴として受け取られている。この太陽と、彼等は儀式によって結びつくことができるのである。即ち、太陽を崇めるという儀式によって自己と結びつくことができるのである。



ユングは、インディアンの村長のもつ威厳と気品を次のように記している。

「そのとき、私は一人一人のインディアンにみられる、静かなたたずまいと「気品」のようなものが、なにに由来するのか分かった。それは太陽の息子であるということから生じてくる。彼の生活が宇宙論の意味を帯びているのは、彼が父なる太陽の、つまり生命全体の保護者の、日毎の出没を助けているからである。』^{引8}

これで分かるとおり、元型と自我とが結びつくことにより、意識の安定が得られるのである。普遍的無意識(元型)の自我への影響は、イメージによりなされることは、前に記したとおりであるが、ユングが見たインディアンの太陽崇拜行動は、自我と元型を結びつけるものとして注目したい。即ち、儀式が元型と自我の結びつきに大きな役割を果たしているのである。

4-2 神話的関わり(意識と元型の同調性)

意識と元型は対立的側面も見られるが、それは全てではない。林はこの点次のように指摘する。「元型とは本来的に意識によって抑圧されたものではない。意識が存在するか否かにかかわらず存在してきたし、存在しつづけるものである。意識と無意識がもともと対立的だということは言えないのである。元型が意識と対立的に現れたり、意識を補償する作用をもつのは、とくにヨーロッパ文明人のように意識のあり方が偏っている場合である。意識が一面的になればなるほど、それを補償するような形で元型が現れやすいとは言える。……中略……意識はむしろ元型的な内

容によって、知らず識らずのうちに規定されているばあいのほうが多いのである。たとえば未開部族の伝承（集団表象）や神話、また古代や中世の宗教的観念は、元型的なイメージがそのまま意識化され、物語や儀礼になったものと言うことができる。^{引用9}

伝承、神話、物語、儀礼などをこのように元型の反映と考えると、これらは、自我と元型を結びつける働きをしていることになる。従って、物語を創作したり、既存の物語を再認（読むこと）することにより、自我と元型を交流させることができるのである。

日本においては、昔話の語り聴かせは、古くから説経の形で寺社の境内や辻堂で語られていた。天王寺や善光寺が主な場所であった。岩崎⁴⁵は説経について

「説経とは中世末期頃の民衆の世界を発生之母体とする語り物である。……中略……ムシロの上に大きな傘を立て、その下で月代を剃り、羽織を着た男が、立姿で、籠を摺って説経を語っている。その回りに男女数人が、あるいは深く首をうなだれ、あるいは顔に手を当てて泣きながら聴き入っている」^{引用10}

と、その内容と、語る人、聴く人の様子を述べている。この語りものも神話、昔話、と同じく元型的イメージが中核となっているので、それを語り、または、聴くことは、自我と元型の交流を示すものとみることができる。これにより当時の人たちは、心が癒され心的安定を得ることができたものと思われる。

4 3 創造的関わり（創造的退行）

自我は、無意識からの心的エネルギーの進行により、諸種の心的活動を行うことができる。この心的エネルギーが、無意識に逆行することがある・いわゆる退行現象⁴⁶である。退行に関する概念は一般的にはネガティブなものとして受けとられていたが、クリス⁴⁷により創造的な働きがあることが研究された。クリスの研究が基で「創造的退行」なる概念が明確化された。⁴⁸ 即ち、退行は、自我にとって有益なものであり、創造的で健康的な面を持っていると考えられるようになった。この考えに従えば、退行は、創造活動にとって必要なものであり、その創造活動は、自我を無意識に結びつける結びの役割を持つことになる。しかも、その関係は健康的で生産性の高いものである。心的エネルギーが退行すると、自我は「一次過程」⁴⁹の状態になり、心理状態としては思考、感情機能が低下し、空想的表現が多くなり、理論より情動が先行するようになる。こういう状態の基で、新たな心的内容が誕生する。即ち、創造である。従って、創造活動は、無意識と意識を結びつける結果となる。ここに無意識の肯定的側面を見ることができる。この肯定的側面は、一面、無意識の否定的側面から自我を守ることとなるのである。なぜなら、無意識と自我が生産的な面で結ばれている時、同じ時間帯で否定的な面の活動を進めることはできないからである。

4 4 補償的関わり（全体性）

人間の心（意識と無意識）は常に全体性⁵⁰を保持しようとする。意識があまりにも一面的に活動すると、無意識がその偏りを是正しようとして、別の言い方をすれば、全体の調和バランスを回復しようとして、活動が開始される。臨床場面では夢として無意識の心的活動が象徴的に現れることが多い。夢は意識の補償作用をしている。

30歳代男性の夢 ^{引用11}

「ある会合で名刺交換となり、相手に私の名刺を渡す。相手はそれを見てげんなりした顔をして『失

礼ですが、お名前は』とたずねてくる。渡した名刺を今一度よく見てみると、いくつもの役職名をかかれているものの、私の名前が書かれていない。びっくりしたところで目がさめる。」

個人として生きるより、社会人 公人 企業人として頑張ってきた人は、生活が後者に偏りすぎてバランスを欠いてしまう、そのとき、無意識から個人生活の大切さを暗に示すメッセージが、夢の形で送り届けられるのである。自我と無意識は夢を媒介として交流が行われ、心の安定が保たれるのである。

5 意識と無意識の関係

無意識状態から意識が形成され、外界との間に関係が生じ、発展し、自分の世界が形成される。自分の生活にとって都合の悪い心的内容は、抑圧されて無意識に移行される。無意識には、このようにしてできたもの（個人的無意識）と、人に本来的に備わっているもの（普遍的無意識）とが共存していることは前述のとおりである。この抑圧によってできたものにしろ、本来的にもっていたものにしろ、無意識は、意識にとっては肯定的にも否定的にも働く。意識が社会生活をスムーズに遂行するためには、意識と無意識との関係が安定的に移行しなくてはならない。

本論においては、無意識内のあり方と、意識との関係について分析してきた。特に、本論においては、個人的無意識の自我防衛的な役割について分析を重ねてきた。その結果、個人的無意識は、普遍的無意識の否定的側面の防衛網としての役割が存在することが分かった。個人的無意識内に存在するコンプレックスは、意識にとって影⁹⁾の存在である。自我を光と例えれば、光があって影がある。自我があって、コンプレックスがある。即ち、意識を取り巻く意識と考えることができ。換言すれば、第二の意識と考えることができるのではなからうか。意識の起源を考えると、はじめに存在するのは無意識であった。しかも、この無意識は普遍的無意識であって、個人的無意識ではない（普遍的無意識 意識 個人的無意識 前出2 3）。このことは、静的に構造的に、心を観察すると、意識の深層には無意識（個人的）が存在するが、臨床場面を考えると、無意識は、力動的で、相互作用的でしかも流動的な働きをしている。この点氏原は、「地と図」の概念を導入し「意識の場」なる考えを提示されている。

「精神的健康が意識の領域の広さと直接的に対応していないらしい、とはいえると思います。これは心の世界を、はっきり両分された意識と無意識の二つの領域から成る、と考えることからくる矛盾です。さらにいえば、意識とは一つのダイナミックな動的プロセスであるのに、それを静的な心の構造として考えようとする所に無理があるからです。そこでプロセスとしての意識を図式化しようとするれば、必然的に図と背景との相互作用からなる一つの場、ということになります。」^{引用12}

この考え（場の考え）にたてば、個人的無意識も、普遍的無意識も「図と背景」⁵²と考える限り、同一線上で考えることが可能である。即ち、意識化されたものが「図」である。しかし、この「図」即ち、意識化（図化）するには、対象の性質、そのときの状況等によって、難易が分かれるのではなからうか。更に、別の見方をすれば、意識化することによる危険性は、個人的無意識と普遍的無意識とでは差があるのでは無からうか。即ち、前述のとおり、普遍的無意識内のネガテウな凄まじい破壊力を持った心的内容と、コンプレックスとではそのエネルギーの差は比較にならない。

このことは意識、無意識を一つの場と考えた場合、「図」として成立しやすいものと、成立し

にくいものがあることを示すものである。しかも、背景としての無意識内で、動的な変化が絶えず繰り返されていると考えなくてはならない。

意識への影響度を個人的無意識と普遍的無意識で比較すれば、問題なく後者の方が大きい。しかし普遍的無意識のあり方は、多分に潜在的で、間接的である。即ち、個人的無意識に比べると、普遍的無意識は意識から遠く離れている。個人的無意識は意識に近く、直接的で、日常的でその作用も相互交渉的に行われている。ユングがコンプレックスは心的生命の焦点⁵³といったのはこのような事情による。個人的無意識は普遍的無意識から心的エネルギーの補給を受け、意識との関係の中で活動的に消費されていく。このように見ると前述（3 4）のとおり、個人的無意識（コンプレックス）は普遍的無意識の肯定的側面、否定的側面をあわせて意識に活動性を与えるものとして、また破壊性から自我を守るものとして作用していることが分かる。

5 1 無意識内の葛藤

無意識内の心的存在であるコンプレックスとアーキタイプ（元型）のダイナミックな活動は、前者が個人的なもの、後者が全体的なものと、それぞれ特徴を持っているが、この二つの存在がダイナミックに相互作用するとき、元型的イメージはコンプレックスに収斂吸収され、しかる後に意識に働きかける。このような経過をとるのは、コンプレックスの方が意識化が容易であること、しかも意識から主体的能動的に働きかけることができることが原因であると考えられる。それに対して元型は、意識にとって受け身的であるため、自我からの働きかけが難しい。ここで大切なのは、コンプレックスと元型が二個の独立した存在として、互角な関係を持っていないということである。意識を影で支える存在としてのコンプレックスは、普遍的無意識に浮かぶ意識の影と見ることができる。従って、ここでは二者の静的な関係とみるよりは、二者の動的な在り方とみるのが適当と思われる。

6 ま と め

人の心は、無意識から意識が、意識から自我が芽生えるところから始まる。その過程は、ウロポロス 太母 分離 英雄 変容（結婚）のプロセスをとる。確立された自我は、主体的に社会生活を始める。社会生活を始めると、社会的に承認されない心的内容、自我が受け入れることのできない心的内容等は、抑圧され無意識となる。かくして個人的無意識が形成されていく。無意識は、生来的に存在していた普遍的無意識であれ、自我に抑圧されてできた個人的無意識であれ、皆同じである。しかし、自我にいろいろ影響を与えるものとして無意識を考えなくてはならない。無意識は、自我が受け止める範囲において意味を持つものである。この二つの無意識が、無意識内で相互関係を持ちながら、自我に影響を与え、それが自我をして活発な心的活動を展開させることとなる。この二つの無意識は、共に、自我にとって肯定的な側面と否定的側面を持つ。更に二つの無意識は、互いに干渉しあって活動し、それが結果的に自我への否定的な影響を緩めるものとなっている。即ち、個人的無意識の中のコンプレックスが普遍的無意識の凄まじい破壊性を緩和する働きをしているのである。また同時に、心的エネルギーを個人的無意識を通して自我に供給する働きもしている。このように肯定的な面に注目して見ると、いろいろの効果を見ることができる。

無意識を個人的無意識、普遍的無意識と分けて自我に与える効果を分析することは意味のある

ことであるが、同時に、無意識内でどのようなダイナミックな活動変化が行われているか、を分析することも意味のあるところである。これを分析するためには、二つのことが明らかにされる必要がある。即ち、構造と機能である。構造面では、元型とコンプレックスが主たるものである。機能面においては、心的エネルギーの無意識内における大きさと流れを分析することにある。次に分析されなくてはならないものは、イメージである。このイメージは自我との関係で生じるものであることは勿論のことである。心的エネルギーは、個人的無意識を通して自我に進行し、心的活動となる。心的活動がスムーズに行われないと退行を起し、心的活動が停止し、内的活動が始まる。(創造的退行) このように心的エネルギーは一度個人的無意識を通して進行し、自我の関与の元に心的活動を進める力となる。この心的エネルギーはコンプレックスの活動を盛んならしめ、ひいては自我の行動を促進させることとなる。

普遍的無意識に存在する元型は、イメージとして自我に働きかけ、自我は外的対象物に元型イメージを投影し象徴化し、認知する。この象徴化された対象とは儀式により結びつくことができる。(4 1) このように普遍的無意識は、直接自我に結びつく一面も持っているが、もう一つの側面もみられる。それはコンプレックスとの関係を通して自我に働きかける側面である。

個人的無意識は、普遍的無意識と自我との中継点でもある。又個人的無意識は、普遍的無意識のエネルギーの進行として、普遍的無意識の否定的な破壊性から自我を守る緩衝帯として、その役割を持つことも分かった。

無意識内が安定的に推移するには、自我との交流が必要となる。無意識との交流は、儀式的関わり、神話的関わり、創造的関わり、治療的関わり、等いろいろ考えられるが、自我と無意識を相互交流させることにより、自我と無意識の安定的状態が保持できる。

自我、個人的無意識、普遍的無意識の三者の相互関係の分析を試みた。中でも本論の目的は、個人的無意識が自我と普遍的無意識の関係の仲立ちをする役目を担っていることの分析であった。その一端を果たすことができたと考える。

引用文献

- 1 山中康裕「臨床ユング心理学入門」 php 新書 1996 p 38
- 2 河合隼雄「無意識の世界」 日本評論社 1997 p 8
- 3 河合隼雄「コンプレックス」 岩波新書 1971 p 114
- 4 マックス・リュティ 小沢俊夫訳「ヨーロッパの昔話」 *Das europaische volksmarchen* 岩崎美術社 1969 p 190
- 5 河合隼雄「大人になることのむずかしさ 青年期の問題」 岩波書店 1983 p 19
- 6 ユング 林道義訳「元型論」 紀伊國屋書店 1999 p 10~p 11
- 7 ユング 河合隼雄 藤縄昭 出井淑子訳「ユング自伝2」 みすず書房 1973 p 72
- 8 ユング 同上 p 74
- 9 ユング 林道義訳 元型論 紀伊國屋書店 1999 p 477~p 478 (訳者解説欄 意識と原形の関係から)
- 10 岩崎武夫「さんせう太夫考 中世の説経語り」 平凡社 1973 p 8~p 9
- 11 河合隼雄編「無意識の世界」 日本評論社 1997 p 16 夢と無意識(大場登)
- 12 氏原寛「心の一生 ユング派に依るころの原風景」 ミネルヴァ書房 1990 p 66

註

- 1 無意識を最初に扱ったのは、F. W. Schelling 1776 1854とされている（シェリング 西村啓治訳「人間の自由の本質」岩波文庫）一般的には無意識はフロイト（Freud, sigmund 1856 1939）により発見されたとされている。ユング（Jung, carl, gustav 1875 1961）はフロイトの影響を受けて無意識の概念を発展させた一人である。
- 2 Jung, Carl Gustav (1876 1961)
- 3 Freud, Sigmund (1856 1939)
- 4 フロイトは意識にとって都合の悪いもの、意識の存続を脅かすもの、危険なもの、日常生活で必要なくなったものによって無意識は構成されていると考えた。
- 5 フロイトが無意識をネガティブなものと考えたのに対して、ユングは価値をとまなはない自由なものとして考えた。
- 6 深層心理学における自我 ego を言う。
- 7 不登校 怠学、病気、障害、経済的事情、家庭事情によって学校を休むのを除いた休学全般
- 8 いじめ 「単独、または複数の特定人に対し、身体に対する物理的攻撃または言動による脅し、嫌がらせ、無視等の心理的圧迫を反復継続して加えることにより苦痛を与えること」検察庁（心理臨床大事典 培風館より）
- 9 虐待 児童虐待の防止に関する法律（平成12年5月17日可決・成立）この法律において「児童虐待」とは、保護者がその監護する児童に対し、次に掲げる行為をすることをいう。
 - 一 児童の身体に外傷が生じ、又は生じるおそれのある暴行を加えること。
 - 二 児童にわいせつな行為をすること又は児童をしてわいせつな行為をさせること。
 - 三 児童の心身の正常な発達を妨げるような著しい減食又は長時間の放置その他の保護者としての監護を著しく怠ること。
 - 四 児童に著しい心理的外傷を与える言動を行うこと。
- 10 Henri, F. Ellenberger 木村敏 中井久夫監訳「無意識の発見」 上下 *THE DISCOVERY OF THE UNCONSCIOUS* 弘文堂 1980
- 11 深層心理学における自己 self を言う。
- 12 ここでは一般的に論じられている個人的無意識 personal unconsciousness と普遍的無意識 collective unconsciousness を考える
Ken Wilber 吉福伸逸 管靖彦訳「意識のスペクトル1, 2,」 *The Soectrum of Consciousness* 春秋社 1985
- 13 無意識の階層的認識と同時に、無意識内の状態像の研究も進められている。ここではコンプレックス、記憶、元型を考える。
- 14 個人的無意識の構成要素 意識内容が強度を失って忘れられた 意識が抑圧した内容 意識に達するほどの強さを持っていないが何らかの方法で心の内に残された感覚的な痕跡の内容 ユング心理学入門 培風館 1967 p 94 河合隼雄
- 15 ユングの仮説概念で普遍的無意識、集合無意識とも訳されている。
表象可能性の遺産として、個人的ではなく、人類に、むしろ動物にさえ普遍的なもので、個人の心のしんのきそである。 ユング心理学入門 培風館 1964 p 94 河合隼雄
なお上記 註14、註15の出典は *The Structure and dynamics of the Psyche* による
- 16 個人的無意識の中にはコンプレックスが形成される。このコンプレックスは言語連想検査法、夢分析等で存在を確認されている。この考えに従う。
- 17 氏原寛「心の一生」 ミネルヴァ書房 1990 P 67
- 18 archetype ユング心理学の主要概念の一つ
- 19 ユングは元型の種類にはペルソナ、影、アニマ、アニムス、太母、自己や始源児、老賢者、英雄、トリックスターなどを考えているが、ヒルマン Hillman, J はあらゆるものが元型であると考えている。（この項心理臨床大事典 氏原寛ほか共編 培風館 1992年 p 1022より）
- 20 フロイトによって解明された概念。従って、個人的無意識の分析理論として研究されている。ここでは普遍

的無意識に適用を試みようとする。

- 21 エーリッヒ・ノイマン Erich Neumann 1905～1960 分析心理学者
- 22 ウロボロス uroboros は円をなして自分の尾を飲み込む蛇として描かれている。ノイマンはこの蛇ウロボロスを自己完結性として描き人の始源を象徴するものとした。
エーリッヒ・ノイマン林道義訳「*ursprungsgeschichte des bewusstseins* 意識の起源史上」紀伊國屋書店 1984 p 35
- 23 進行 退行に対する概念として考える
- 24 ユングにより「感情に色づけられた心的複合体」として体系化された。この語を初めて用いたのはツイエンであるが体系化したのはユングであるのでユング理論に従う。
- 25 ここでは、自我とコンプレックスの力の差を問題とする
- 26 二つの人格が交互に出現する現象とする
- 27 自分が重複存在の人格を持ったものとして意識していること
- 28 一般的には自我とコンプレックスの関係はコンプレックスから自我への一方的なもので自我からの働きかけは受けていないとされているが(氏原寛「心の一生」 ミネルヴァ書房 1990 p 67)ここでは心理治療を含めてコンプレックスへの関わりを認めるものとする。
- 29 河合隼雄「コンプレックス」 岩波新書 1971 p 75
「コンプレックスは心的生命の焦点であり、結節点である。これは無くなってはならないものである。あぜならば、コンプレックスがなくなれば、心の活動は静止してしまうであろう。」
この文は Jung, C G Modern Man in Search of a Soul「魂の探求者としての近代人」を河合隼雄が訳したもの
- 30 氏原寛「心の一生」 ミネルヴァ書房 1990 p 67
- 31 関敬吾「日本昔話大成 6」 角川書店 1978 p 182 244食わず女房
- 32 同
- 33 31同上 p 183
- 34 ここではユング心理学の解釈に従う。即ち、人の心は意識、無意識が相補い調和を保って存在している。意識があまりにも極端な姿をとると、無意識は調和を保つために意識と対極的な姿をとる。
- 35 31同上 p 182～225
- 36 コンステレーション constellation 布置
「すぐに原因と結果とをむすびつけるのではなく、いろいろな事柄の全体像を把握することをコンステレーションを読むと言っている。」河合隼雄[宗教と科学の接点] 岩波書店 1986 p 184
- 37 観察者は対象を客観的に見て因果関係を法則的に見いだそうとするのを科学の知とすれば、臨床の知は対象と関わってその存在を知ろうとすることといえるのではないか 参考書 中村雄二郎「臨床の知とは何か」 岩波新書 1992
- 38 ユング心理学の重要な概念の一つで、意識で生きられなかった心的内容として無意識に存在するとの考えに従う。
- 39 逃竄譚は、関敬吾「日本昔話大成第6巻」 1978 p 131～288
- 40 フロイトはコンプレックスの否定的側面に着目した。ユングは肯定的な面をも認めようとした
- 41 collective unconscious 普遍的無意識、集合的無意識とも訳す。本論では普遍的無意識と訳す。
- 42 個体が経験的に獲得されたことが遺伝的に受け継がれることは現代では考えの及ばないことであるが、ここでは心の奥深く人が共通にもつ心的内容を考えることにする
- 43 名前をオチウエイ・ピアノという
- 44 林道義(1937～)
- 45 岩崎武夫(1925～)
- 46 無意識からのエネルギーの上昇を進行とし、その反対の流れを退行と呼ぶ、この一般的な考えに従う
- 47 クリス Ernst kris (1900～1957) 精神分析学者(自我心理学派)
- 48 創造的退行 creative regression クリスの「自我による自我のための退行」の概念をシエーファー R・Schafer 1954が名付けたもの。

- 49 一次過程 primary process フロイト(S・Freud)が用いた概念 本能的にしたいことをすぐに満足させようとする過程 カウンセリング辞典(国分康孝編誠信書房)より
- 50 全体性 wholeness ユングが用いた概念で、意識無意識を含めたもの
- 51 影 shadow ユングによる概念。元型の一つ
- 52 「図と背景」をここでは「図と地」と同じ意味に解釈する
- 53 前掲29

資 料

食わず女房 (註31)

むかし、むかし。ほれ、萩野みでだ山中のある家さな。あんさん(若者)がいあしたけど。そのあんさんがな。山で仕事をして、おまま(ごはん)くうごに、「なんとかして、ままかねあねこ(ご飯を食べない嫁)欲しでもんだ。ほうゆう嫁こは授がねもんだべが」山中で、一人で口さ出したなですと。そうしたれば、あんさんのすぐ近く、側さあった木まだ「あんさん、あんさん、んだごんたら、おれ、なるが」ものばいうそうですと。その木はつりとしたきれいだ、めんごけだ(美しい)木だったそうですと、股木だったなですけど、「ほんだごんたら、おれ、なっか」「ないだよ。おめ、嫁こなれっかや」「なれる」とクルツ、と、ええ嫁こになったどや。あんさんごとして「ええ着物ばきて、まま食ねくて、まずええ嫁こだべ」と思ってその木ばわのわけ(自分の妻)にしたど。ほうしてな。その嫁こ一緒になって暮らしたど。あんさんが山さ出がけだっというど、その嫁こ、五升炊き釜ば出してくつと。ほうして、五升炊きピチツ、と飯ば炊いでは、たあだ、ほれ、ピツツ、ピツツ、ど握って、ただはんで(飯台)いっぺうち(一面)に握ってな。それがら、頭の髪ばな、ザクツ、と割って、シットン、シットン、シットン、ど五升炊きの握り飯ばみな食うがったなですと。ほうしてるうち、あるときな。村のある人がな、そごの家さひょっこりかだかつてみれば(立ち寄ってみたら)嫁こまだ時分どぎでもね、時でもねどぎ(時はずれ)に、大釜さ飯炊いたもんださげて、不思議してな、「あのおまま(ごはん)なにすんなだべ。なにすんなや」て、聞いてみだど。「ん。これが。おれまだ、これがら山さ持ってんくなよ」て返答するど。そして、そういった人な、「それほど山さ持ってたたて、誰が食せる人いだもんだべが。まず、まず、なにすんなだべや」どんて、じいっ、と隙間こがら見たなだど。それも知らねでな。飯ば握りあげでな、できだどいうどこんど頭の髪の毛ば、ザグツと割ったどいうど、頭の中さ大きな口がははってきたど。ほしてな、握り飯ば、シットン、シットン、シットン、と入れてみながら(全部)べろつと残さず食べしまったなですけど。ほつと、見っだ人あ、どでして、どでして、どでかっぱずして(びっくり仰天して)はって逃げだけど。「これは、ただなる人じゃね、きつと鬼に相違ね。早ぐあんさんさ知らせねんね」と、山の帰りばな、まちもどましく(待ちきれない様子で)な。それからあんさん山がら来たもんだし、「まずまず、おめまだ、まま食ねあねこ欲しなていったもんださげて。まま食ねどごんね、一日それこそ五升飯ずつ食う、あげた嫁こなど、置がれるもんでね。ただのものんねさげ、鬼か蛇か、なにかかにがださげ、あれあ、帰す工面したほうがいいぞ」と、よっくど、よくよく話をしやったどごですと。そしてつぎの日、山さ行ったふりして、梁の上さえって見ていだどごだど。ほんだごどしっしやね(知らない)嫁こ、まだ米ば五升焚ぎ、いっぺしかげで、釜いっぺ炊いだなですけど。そして炊いだままいっぺ、握って、髪ば割って頭の中さ、やっぱり、シットン、シットン、シットン、と割ってべろつと食ってしまったどな。たまげだなは、あんさんで、「こりあただのものんねべな。鬼か蛇に相違ない。こりゃ困ったもんだ」とな。それから、考えたどごですと、ほうして家に帰ったふりをしながら、ガラ、ガラ、ど荷物おるすふりしたど。「五月の節供も来たんだしな、おめ、まだ節供礼(節供の里帰り)にも行ってないし、節供礼にでも行ってきたらいいんねがや」「んねば、おれ家さ、おめも行ってけるがや」というなだもんで、あんさん、「んぐべ(行きましょう)いぐや。おめ家さなのどごまで行くべや」とな。すかだねべし。あんさんは嫁こさくついで行ったなですと。そうしたどころ、どごまで行っても「あの山かんげ(山の陰)あの山のちょこつと陰。この山の陰」ど。それこそ、何里何十里歩いて、どごまで連れでんがれっかわがらねなで、何里歩いても家の一軒もないなだけど。「おめ、こんど先さ歩いていってける。おれな。そこらさへんつ(便所)さ行きでぐなつたさげて。おればんば(大便)してるうち、おめ、先さあいでける(先に行ってくれ)」ほして、やつとにことで、嫁こ離れて、わばり、ワラ、ワラ、ど走ったど。すつと嫁こ鬼になってブーン、と飛んで来たど。「この野郎、すめかねすねぞ、

どごまで逃げだて追いかねすねぞ」ブーン、ブーン、とあんさんの前になり後になりして追て来ると。なんぼ走っても走ってもだめだお。ほうして、食われるどいうときな、あんさん、蓬、菖蒲のいっぺあっとさ出だど。蓬、菖蒲は節供にさすもんだじゅすな。いっぺあっとさ入って、ヒタツとは、うちひてなあて（うつぶせになって）隠ってたなですと。ほすっと来たど、こんだ、鬼だもんだお、それごそごしやえで（怒って）ブーン、ブーン、と飛んであな。グリグリ、と回り回りしてな。「ああ。ああ。ほごさいだな。ひと思いに食ってしまいでげんと。ほごさ入れば、おれの命あないし。ああごしゃげる」ブーン、ブーン、と舞って歩くど。「そごさ入ると、蓬と菖蒲じゃからだが溶げるていうし」と、いつまでも、いつまでもほうして嫁こまだ口説くもんだけど。とうとう、食いかねで消えだもんですけど。んださげて、五月の節供というと、菖蒲ば軒先ささしたりするし、蓬も魔物除けに、一緒に屋根ささすように、昔からするなですけど。とんびすかんこ・ねっけど。 山形県新庄市